

四旬節第5主日 ヨハネ 11:3~7,17,20~27,33b~45

ヨハネ福音書では、「友」がキーワードです。「弟子」に較べて「友」は親しさを感じます。

ヨハネ福音書では、「友」のタイプを紹介しています。

第1のタイプは洗礼者ヨハネです。「あの方は栄え、私は衰える」(3:29~30)という言葉にもあるように、神様のために人生を捧げても、自分が忘れ去られることを望みます。

第2のタイプは、自分の住まいに招いた2人の弟子(1:35~42)です。「来て見なさい」と、イエス様が弟子を選び、自分と一緒にいるようにされました。長い間、一緒にいることはイエス様との友情の特徴です。

第3のタイプは、マルタとマリアです。マリアは、イエス様の言葉を足もとで黙って聞く、観想的なタイプです。マルタは、積極的に仕えるタイプです。イエスに、物おじしないであけっぴろげに語ります。(11:21~22)

そして4番目がラザロです。「私たちの愛する友ラザロ」(11:11)と紹介されています。でも、他の人物は、イエス様に対して何か積極的なことをしているのに、ラザロには何もありません。会話もないし、ラザロがどのような人物かわかりません。イエス様とラザロの間に友情があることは確かですが、その理由をあえて表現すれば、ラザロは何もしていないということです。

そのラザロが亡くなりました。死と命が今日のテーマです。ラザロは死んで4日経っていて、死は動かさない事実です。何も希望が持てないと感じます。「早く来て下さい」というマルタとマリアの願いに、はじめは動こうとしませんでした。きっとイエス様は、ラザロとの友情を示すことと自分に危険が及ぶこととの葛藤に苛まれていたのでしょう。イエス様は決心してラザロのもとに行きます。

ラザロの蘇りの場面では、涙を流すイエス様の感情の高ぶりが強調されています。マルタ、マリアの姉妹にも深い同情を寄せています。友の死を目の前にして、イエス様は心を揺り動かして涙を流しています。これは、他の奇跡物語にはない特徴です。どうして、これほど強調されるのでしょうか？ それは、おん父から授かった最も難しい使命をこれから果たすからです。その使命は、自分の死で、ラザロの命を取り戻すことです。前代未聞の救いです。イエス様は、ラザロを蘇らせることで自分の使命を完成させようとしています。

ラザロの蘇りは「友の死」という私たちが体験する悲しさを、救いの神秘と結びつけます。この結びつきで、私たちに励まそうとしています。

イエス様は、悲嘆に暮れるしかない私たちに、予期しなかった方法で、自分から近付いてくださいます。この方こそ、人となった神のみことばです。イエス様は、取り立てて何もできない私たちに友として起き上がるように、手を差し伸べ、浄め、本来の姿に戻してくれます。

私たちがイエス様に差し出せるのは、ほんの少しですが、それを受け取ってくださいます。そして、もったいないほど豊かに私たちを変えてくださいます。私たちもイエス様の友の一人です。

危険を冒しても私の命を救おうとされるイエス様を黙想しましょう。